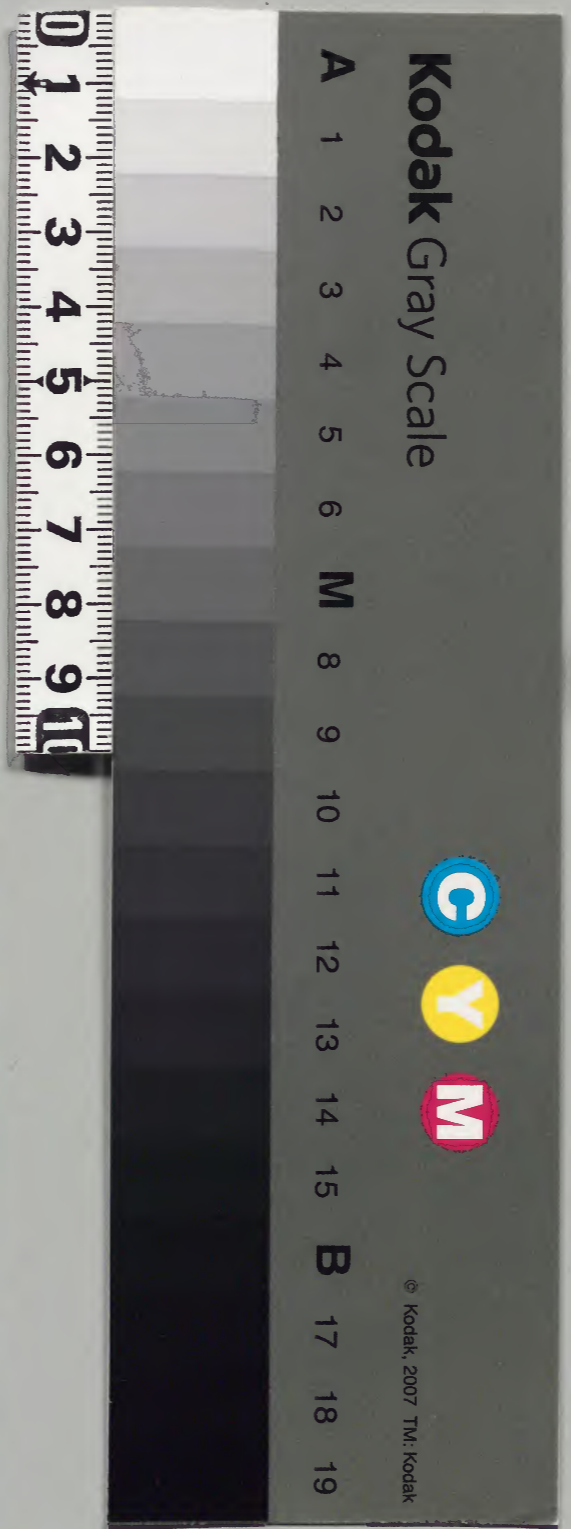


日本書紀傳

十三卷
陽

和
一〇五二
號

内閣文庫		
番號	和	10522
冊數	156 (39)	
函號	特	85 1



教
文庫印
郡省

高島
大庫

南
庫

根津国住吉神郡船玉神社之有を以て北住吉神大ハ
 同トクゝざる事を明し可一三代宝録ノ貞觀十四
 波国正六位上船盡比咩神從五位下と有る船盡ハ船
 泊めて土佐日記又詔ゆる手向する所めて津泊る
 可一百葉ハ乃波多豆と有る三ノ國之盡と書た
 水ハ盡字ハ波氏と訓べ一ノ何所ル可船泊為長武
 有水ハ其津泊り就て然稱奉水りめて別神ハ非
 トウ一諸今世ノ船よて船玉神とて祀さる其神体ハ
 双六の采と籬とを以て祭さる采ハ障神より出たる
 可く籬ハ比奈麻治比賣神より起水る者と見えたる物
 連るけり軍るりり ○白云ハ本ノ麻袁斯氏麻袁佐
 田有て成一来るるり
 久と訓り其千人所引磐石を中ニ置て泉門を塞ぎ給
 へハ伊弉册尊ハ泉中ニ伊弉諾尊ハ頸国ノ別處と立
 て相教放て御在一坐か故ニ牙ハひニ御言通つざると

内一二六八三號

○日本書紀傳十三

○六十六

天孫降臨章下第
一書子時有奏
曰有り

以て其塞^{セキ}を守給ふ泉守道者を以て伊特冉尊より伊
特諾尊より令自給へる御言を取傳へ申せるあり此を
以て上よ註せるが如く泉守道者ハ謂ゆる泉門塞
大神ハ御在し坐す御事強灼き者あり然らずハ此を
何水の神とク爲し又逆返大神と申すも泉門ハ塞て
防返し給ふ申あり此等の事傳^{二百六十六丁}み己
よ云うを考合す可^{二百七十丁}
ある可^{白云ハ佛經ハ謂ゆる白佛言と}
よ云ふ事を惟よ令知むこと^{如此有る上ハ古言}
白字ハ正字通^{下昔上曰稟白同北草述事陳義亦曰白}
と見えたり石の稟白ハ此よ白云云云云云當る可^一
○有言兵^能理^多麻^布美許登^麻世理と訓べ伊特

冉尊の御言宣し給ひし事を取傳へ申せる所あるが
故よ然訓よぐハ叶はず例ハ春日祭詞ハ天皇我大命
尔坐世^能恐岐云云能廣前仁白久云云平野祭詞ハ天皇
我御命^尔坐^世云云能廣前^尔白^給久云云久度古開詞
ハ天皇我御命^尔坐^世云云能廣前^尔白^給久云云有
て此三例共ハ大命^尔坐^世白^給久と係り此の白云
有言^其兵と有^合へり若て其有言兵ハ取傳へ申す泉
守道者の上の事よて白云ハ先の伊特諾尊を稟よへ
たら語多^續紀第三詔よ此乃天^巨日嗣之位者大命
尔坐^世大坐^二而治可賜^上云云第五詔よ倭根子天皇

給ふ所あり其意緩あり故河禮登美麻斯登と訓べ
一那と云ひ伊麻斯と云ひ美麻斯と云ひ言の義ハ己
傳六卷八十六丁に云はば今云ふ限小非す此ハ
吾與汝との例○生國矣ハ本小己年國乎生氏伎ニ有
る其訓小從ふ可し此生國ハ八洲起元章ニ於是陰陽
始適合焉夫婦云ニ生大日本豐秋津洲云ニ由是始起
大八洲國之號焉其第一書ハ即將巡天柱約束曰云
ニ然後目官共住而生兒云ニ由此謂之大八洲國矣
ニ有が如く此大八洲國ハ更あり蛭兒ハ東北の夷嶋
あり粟洲ハ西南の外城あり其等と合せて大地萬國
の恙を漏さず生成し給へり御事己傳六傳七の

卷ニよ委し説るが如し古事記ハ殊ニ委曲少
故以此吾身成餘處刺塞汝身不成合處而以爲生國
土奈何伊邪那美命答曰然善云ニ於是伊邪那岐命先
言阿那迹夜志愛表登賣袁後妹伊邪那美命言阿那迹
夜志愛袁登古袁如此言竟而御合生子淡道之穗之狹
別嶋云ニ次生大倭豐秋津嶋亦名謂天御虛空豐秋津
根別故因此八嶋先所生謂大八嶋國然後云ニ既生國
竟更生神云ニ有て其次第甚二分ニし者あり此
ハ因て丹後風土記ハ國生大神ニ申せり然ハ生
國ニハ何の事も無く人の子を産か如くハ生給へり

一者あり 記傳五ノ或人の国を生云事を信ずて經
 生之有も室ハ唯經營の事あり云云ハ彼御身の成
 不合處成餘處を尋て麻其被比一給へる事ありと委
 曲云云ハ何の要ナシ此等經營ハ然一も關係
 可き事あり且書紀ハ乃至産時先以淡路洲ヲ胞
 之云ハ雙生隱岐洲與佐度洲之云々も皆人の子を生
 が如くハ産給へる故ありとヤ之有を思ふ可一猶次
 多々求注子の下 ○奈何ハ甚く慷慨イカレて其語ハ力と添
 合せて云べし 如何棄置當就之國而
 云辭あり例ハ瑞珠盟約章ハ如何棄置當就之國而
 敢窺竊此處宇室鏡開始章ハ謂當豐葦原中因必為長
 夜云何天鈿女命嘆樂如此者宇室劍出現章ハ是神劍
 也吾何敢私以安予ると猶多在り此等の例を押直
 て考ふ可き事共なり 此奈何云ハ者予云ハ右の
 如く甚く慷慨と云ふ反語あり

又奈何云云云云難る詞あり有り又疑の辞あり
 有るも有らざる皆同ト辭めて其續け様の異なる耳あり
 ○更を佐良ると訓ハ事の改易イカレ辭あり其ハ古
 事記ハ故尔反降更往迴其天之御柱如先又ハ既生因
 竟更生神あり見え可葉イカレ事ノ還日者又更大御
 神等云ハハ三丁ノ更哉秋ノ欲見世武又イカレ又更而
 雲勿田菜引十イカレノ吾ハ更ニ戀ル相尔家留十一イカレ
 神成戀我更為鴨又イカレ更哉妹尔吾戀將居十二イカレ
 思咲ハ更ニ思許理表目八面十四イカレノ奈仁曾許能
 兒乃己許太可奈之伎あり有り言義ハ公イカレ同トく
 事の新ハ成り意あり可イカレ既而の既ハ棄イカレ同トく
 如く此も其事ハ如此

邪那岐命伊邪那美命ニ柱神修理是多陀用幣流之用
云々有之記傳五二十五丁十此天神の大命ハ漂蕩へる
潮を固めて先国土を産へき基なる於能基旨嶋を成
すより始て国土を産生て善ハ一々經營成し固むる
迄を係て詔へるめて都久流と云ハ廣スして産給ふ
事も其中に存るなり云々水たふか如し次ハ上る
る己生国英の下に引る御紀又古事記あるの文ハ全
く国土を生成し坐る事をして經營して給ふ事ハ非ら
ざる右に引く吾與汝所作之國未作竟之宣へるハ其生
成し坐る国土を經營して給ふを云るなり紀記共ニ殊

更ニ經營クニツクリの事實をてハ見えざる事ありども此の第
二一書ハ次生蛭兒此兒年満三歳脚尚不立と有る脚
ハ借字也其草むる事傳七五三丁十云々如くありハ己
よ生成すに隨ひて又作して給へる事明しハ一變る
を此ハ其所作之國ニ宣へるを承るなり國英ニ申
給ひ又求生と申して給つるなり此ハ子細有る事
るなり云々を見ても知べし但ニ柱神の國を作給へる
給へる者ハ一々後ハ大己貴史彦名ニ神の国土の有
る限と述作して給へるなり如き細くしたる事ハ
ハ非ずて其生成し坐る度毎ハ唯其地方を凡ハ定て
其國の有形ありを先ハ宣しき程ハ作して置し者
可し故此求生ハ其下津國ハ御在し坐るなり此国土

此事傳廿九卷
百八十九下云々

を伊弉諾大神と共に相保たせ御在り坐べき所由有
て其有たせ給ふ事と申給へり其の如何して
保たせ給ふと云ふ傳二百六丁に己子且に註るが如く
凡天下国土に生こし活る又草は更るる在こし有ゆ
る萬物共其こし形質を具へて世に在る其本因り
も宇宙萬國に云ふ所と然しる替る事無くして風火
金水土の五を合成て其形體有る事なりが此の萬物
の中は最靈と云ふ人を以て此を述ぐ諭すも風火
の氣なり靈なり金水土の其形體を成す骨なり肉な
り津液なり此五物の精相聚り結り現身の世入るに年

來り事なり儲元と成る五物は各神坐り其風神火神
二柱に伊弉諾大神は属坐り神等なり其の第六の書
に伊弉諾尊曰我所生之國唯有朝霧而黃滿之哉乃吹
撥之氣化為神也是風神也と有り又其次に至る火
神輒遇突智之生也其母伊弉册尊見焦而化去と有り
此は女神の御腹より生坐り御子なりと雖も己子此
御子の事は依て泉中に神故りて御在り坐しは御
父神より属奉りて給ふ可き事申すも更るる風火の性
上より昇るるを主と爲る事信し所以有る老るるけり其
鎮火祭詞に國能八十國嶋能八十嶋手生給比八百
神等子生給比氏麻奈字子火結神生給比美保止被

燒氏石隱坐氏云々吾名妹命能所知食上津國心惡
子予生置臥來奴止宣氏云々此能心惡子能心荒比曾
波云々鎮奉礼上事教悟給支之見えたり
若下金神水神
土神三柱ハ一也伊弉册大神ハ屬奉給ふ可き幽契有
り其ハ第四一書ハ伊弉册尊云々因為吐此化爲神名
曰金山彦次少便化爲神名曰罔象女次大便化爲神名
曰塩山姫之見えたり是あり此三神ハ一也妹妹相嫁
継りず唯伊弉册尊一神の御上の事ハ因て成坐る神
等ハ坐とせば伊弉諾大神ハ屬奉るを給ふ事ハ
理あるを思ふ可一其金水土の性何れも沈と下りて
風火の性ハ相反あり信ハ神隨の事と云へき然

トバ其三神ハ一也伊弉册大神ハ使令此奉給ふ神等
よて坐す事灼然一其ハ鎮火奈詞ハ返坐 氏 更生子水
神匏川菜塩山姫四種物 予 生給 氏 此能 心惡子乃 心荒
比曾 水神匏塩山姫川菜 予 持 氏 鎮奉 禮 止 事教悟給 支 之
見えたり如く其御教言さへハ懇到ハ有ける事を以
曉る可くあり 此ハ金神を云々一鎮火の事ハ用無
も非ず伊弉册尊ハ屬 其五神物の事を今如此云ハ漢
轉ハ似たり事故ハ如何と思ふハ人ハ有るものも
大同類聚方ハ於保奈年知命乃美已止仁云々此登乃
美乃奈連流平自免波安萬都美他麻美巨保乃計乃不

○重胤亦美豆保
乃計ハ水火氣
不_レ多_レ過_レハ二
不_レり

多_二通_一手。加_カ波_ハ世_ニ保_ル豆_ヲ祿_シ奈_レ理_ヲ知_ル之_ヲ保_ル奈_レ利_ト士_ニ奈_レ利_ト。須_レ布_ナ奈_レ利_ト。保_ル念_ル奈_レ利_ト南_ニ訶_ル味_ヲ多_ク奈_レ理_ヲ與_ル通_ル依_ル太_ク奈_レ利_ト訶_ル波_ヲ奈_レ利_ト波_ヲ。奈_レ利_ト久_ク知_ル那_レ利_ト萬_ク那_レ古_ク奈_レ但_レ美_ク味_ヲ阿_レ奈_レ利_ト。加_カ美_ク奈_レ利_ト。利_ト遊_ル毘_ル奈_レ利_ト都_ニ屬_ス念_ル奈_レ流_ト。己_ノ神_ノ御_言めも有_ルを思_フふ可_ク一_ヲ傳_ハ十_ハ八_十丁_ト。此_ノ文_ヲ引_テ註_セる_カ如_ク此_ノ天_津御_靈と云_ハ謂_ユる_ル產_ル靈_ノ御_靈を申_スる_ル水火_氣の二_ヲ交_ハ合_セと云_ハ氣_ノ靜_ル時_ハ水_ニ成_リ動_ク時_ハ火_ニ成_テ水_火ハ此_ノ見_ルる_ル雖_モ其_本ハ氣_ニ謂_ユる_ル風_る所以_ニ氣_ノ動_靜ヲ依_テ水_火を起_ス水_火の相_交合_スヲ依_テ土_ニ成_リ大_ク凝_結之_ヲ金_ニ成_ル

り五_ノ神_ノ物_ハ此_ノ於_テ具_備り_テ天_地萬_物の成_ル所_申此_ノ在_ル事_る人_身ヲ於_テ然_リ天_津御_靈氣_ヲ乘_テ天_降給_ヒ水_火の二_ヲ交_ハ合_セ給_ヒて髓_血肉_等を成_ル給_ヘる_ル土_ノ屬_ル骨_凡根_ニ成_テ給_ヘる_ル金_ノ屬_ル天_地萬_物も人_身も其_形體_ヲ成_ル上_ニ於_テ少_クも異_ル事_無くあ_ハり有_ケる_ル漢_家ハ五_行を以_テ天_地萬_物を理_ヲ説_キき釋_氏ハ地_水火_風の四_ヲを以_テ其_元を云_ヒ洋_西ハ水_火氣_土を以_テ説_キを成_スる_ル如_ク我_ガ神_傳ノ漏_タる_ル本_著者_ヲハ有_ル心_ハ短_キ人_智を以_テ推_ス究_ム罵_ルる_ル有_ル言_ヲ以_テ人_身ハ更_多ク天_地萬_物の道_ヲ知_ル如_ク微_ルる_ル言_ヲ以_テ神_ノ御_言ヲ以_テ知_ルず_ル尊_ク有_ケる_ル理_ヲ窮_盡す可_キ神_ノ御_言ヲ以_テ知_ルず_ル尊_ク有_ケる_ル言_ヲ以_テ知_ルず_ル尊_ク有_ケる_ル故_ニ又_レ鎮_火祭_詞ヲ吾_名妹_能命_波上_津國_手所_有けり

和食信吾波下津国子所知食止甲氏石隠給氏與美津
 坂至生云ここ見之此小旗離と宣ひて二柱神の
 別處と建御在坐て上下より其中間あり顯國と相
 有た坐しむ神策此に至て成り故に此あり伊特
 冊尊の御言子吾與汝已生國矣奈何更末生乎と申答
 へり奈何あふ下津国は放坐りて顯國を悟と與
 相有たざりて申給へり其喜ひし御心此
 に至りて顯見えたるを思ふ可し百葉七一丁下千早
 振神持在命云ここ詠るるど作者の知こ云ふ非
 り可けしども然る古き諺の有りしを取らるる

る可き實所謂有る事ありけり然る人類萬物
 の此大地に生存妙あり軍一も伊特冊尊の下津国
 在して其形體を地縁せて持給ひ伊特諾尊は日
 少官坐こて其氣神を族負トて天引上給
 ふ依て相存て者あり見えたけり其ハ此入
 乘住ハ此大地一も傳四卷十一丁下云其如く
 動頗頃して書夜を成す者あり有けし其地の
 俯伏た問ハ地上の萬物悉く虚空に墮心り此
 り然水とも萬物共其頃た事知さる如く
 大地の地心云心其泉中伊特冊大神の御在
 坐此を率給へり依りて西洋は引力重力ニ云
 者此如此く別處を建て相旅御在坐す御事
 當り却此國土を相保ち坐し御在りて伊

特諾大神の御徳を資奉るる給ふ御事ある者よて如
 此く何水は皆共よ去取させ給うごり事共の重ニ
 此事よ及べらるる自然ハ云へ皇祖天神の天地を預
 相鑿造りせりける靈威よ依りける者よて靈一とも奇
 一とも云知ず尊き御事ありり一猶立返りて傳十ニ
 六よ註せる事共を考合す可一
世の古を學ぶ輩あり
 斯る所由の有りとハ
 更よ心も着ずて伊特丹尊の御事と一云ハ荒振る
 邪しき神の如くは思成り奉らるる其見解の及ばざ
 るハ云ある甚く漫言ある者ありける已よ皇祖
 天神の御事依りて男女二柱の御祖として国土萬物
 を生成し給へり一大神は生ずる御自其物共を生給
 いるがく自毀ふと云ハ謂ゆる自暴自棄と云者よ
 て今日よても小人の爲す斯れハ此の末生乎ハ其生
 所ある者を如何と云ふ高む斯れハ此の末生乎ハ其生

今此我何不用とまじ
 事と希求せしむ
 下尊より生ずる欲す
 るが故よ云こ其反
 證を用ひてを給へる
 なる其神意
 刀有る事と深く味
 いたし可なり

此事を求希ひ給へるが故よ此よ至りる事を明くめ
 申さて給へる者ありけり然れハ上よ引る古事記よ
 伊邪那岐命の吾與汝所作之國と宣へるハ其国土を
 產生し給へりり一經營り給へる迄も係と云ると次
 よ未作竟ハ此の奈何更求生乎と有る當りて其ハ右
 よ説るが如く萬物を造化し給ふ車の成ると否と
ナラ
 こと云るよて初め如く国土を產生すよても亦經營
 すよても非る事あるを思ふ可一此ハ甚く人の僻説
 する所あるが故よ諍ツレハクこも云よる自然らずと一猶生
 成し給ふ可き國も有けむと中途よて止り給ふ状よ

聞え終る生字を伊加牟と訓るが如き僻事も出
来りける者あるをや 古事記は既生國竟更生神と有
るを如此く求生字と有るは別ある義必しも至ら
得有へりうを思ひて右の説を信ふに至ら
し ○留此國の此は其所在す黄泉を指し宣へるは
て第六一書は伊弉諾尊は向給ひて此顯國の事を汝
所治國と申給へる對るは鎮火祭詞にも吾名妹能命
波上津國之所知食 信吾波 下津國之所知 牟申氏 石隱
給 云と吾名妹能命所知食上津國云と彼を主
と 此顯國を客と爲給へる御言遣るるは古事記は
故号其伊邪那美命謂黄泉津大神と有る謂は依れ

△云々又高千穂宮
飯子唯留其芽本
花之依久夜良賣
以之信焉皆

る御言はあむ有ける 此より先は黄泉神と云は有け
其ハ賤一き神共よ伊
後ハ其大神の所知食す御國に成りき ○留ハ處止
る其處に固まり居住へるは留と云す他より
往て其處を我處とて止位は云語あり トモリスム 古事記肥河
飯子其ハ遠呂智信如言来云と於是飲醉留伏寝又
御天降飯子又遣曷神以問天若日子之淹留所由云と
見え此ハ天孫降臨章は天稚彦云と因留住之曰吾
亦欲取葦原中国遂以不復命海官遊行章第三一書は
豊玉姬云と則歸海鄉留其女弟玉依姬持養兒焉其芽
ハ一書は故天孫隨鯨所言留居相待己八日矣ると有

る是あり又此に同下意めて人と共、一行ずして家
に留まるとも然あり万葉九ニに留居而吾者將戀
奈又留有吾子懸而小行葉北月ある有り其外物も障り
留留と云あり万葉四子木乃關守伊將留鴨と有り又物
に堪難きを自然云ふに流流止曾金鶴ハは落涙者
留不勝都も○不可共太ハ右に引る古事記あり伊邪
那岐命の御言よ可還カヘリと宣へるに和へさる給ふ御言
ある事已に註る、如十八洲起元章第一一書よ同宮
共住而生兒に有が如く御妹妹の御中間に坐させが
何處迄も伊特諾大神に後奉らせ給ひて共に還らせ
御在し坐せき道よハ有らざる上は條に説るが如く

其伊特冊大神の彼國に留むせ給へる私の御事
ハ坐らす其國に御在し坐て此國を有らせ給ひし深
き神議有る御言よして古事記よ謂ゆ天神の大命
よ依に修理固成是多陀用幣流之國に詔ごり給へり
御事依るを重し尊と奉らせ給ふ御所為る者
なり次文よ伊特諾尊善之乃散太兵と有る此御言を
諾あひ許し給へるあるを考ふ可き事あり、然ハ水
官共住而生兒に有る吾與汝所作之國未作竟故可還
と有る御言と此に其に對へて吾則當留此國不可共
太と申給へるに次は聞而善之乃散太兵と見えたる
とを一は合で見ると時、其意貫きて實に隱りたり
限しし所無くは儲此ある共太の字を共尔太留と
り有へりけり

訓来る事あるは上代の語の状に非ず其也
訓へきや古事記高津宮段大御歌に夜麻賀多逆麻
和流河袁那母岐備比登^ニ等母逆斯都未婆^ニ有水
ハ共ハ等母逆^ニ訓へき古言あり^ニ太^ハ固^ス佐流^ニ
訓へき古言あり^ニ此續き状餘り言痛し上は引る
可^ニ還^ルの御言は應へて迎信流と訓ひ^テ他なき所な
る者あり^ニ百葉^ハ太^ハ字^ヲ多く由久^ハ用^ヒたり^ニ唯^ハ四
十^ハ方^ニ有^リ十七^ハ向^リ里^ハ佐^ハ利^ハ底^ハ能^ハ和^ハ毛^ハ相^ハ年^ハ等^ハ於^ハ母^ハ信
許^ハ曾^ハ有^リ水^ハ右^ハ二^ハ八^ハ佐^ハ流^ハ訓^ヘき^ニ所^ハあり^ニ其
外^ハあり^ニ大^ハ低^ハ○菊理媛神の菊理ハ漏^ル入^リて千人
由^リ久^ク訓^ヘたり^ニ泉門は塞給ひて彼通路を絶給へり
所引磐石を以て

を唯此神と泉守道者の二神耳出入給ふ御車と見え
て伊弉册大神の白させ給ふ御言を取傳へ申せらる
共は其泉門は於て成坐し神等も御在り坐せらる
然水は此時の事ハ更ふも云ず其より後ハ其別處
を建て相放り坐る^陽二神の御中間は坐て其御言を
宣ひ入させ給ふ時^ニ其を取傳へ申す神ハ唯此菊
理媛神耳が御在り坐けり^ハ其ハ古事記御天降段は
且其天尾羽張神者逆塞上天安河之水而塞道居故他
神不得行故別遣天迦久神可問^ニ有^リ同^ト状^ニ其
泉門^ハ謂^フゆ^ニ泉門塞大神亦名泉守道者の磐石を以

て塞給へハ他神ハ固より通ふ可き處ありぬを唯此
菊理媛神耳不由有て往来いせらる可き借此神ハ
何水の神不と云ハ彼岐神を常世岐姫神と申す御名
坐る准りいハ此を思ふハ決り其亦名あり者あり然
るハ神名式ハ河内國大縣郡石神社常世岐姫神社相
並へるを日吉めて八王子客入宮と相並げせるハ五
子ハ傳十二六十九丁ハ註るハ如く其神ハ八衢比古ハ衢
比賣神ハ坐て此ハ謂ゆる泉守道者此ハ當りらる其
次ハ並給ふ神ハ誰ハ有し岐神ありてハ得有りしハ
こハ其同神の由ありハ更あり常世之上ハ冠て申せ

多も其泉國の事あるを考合す可此段ハ載るる神
所由を何水云云云乃所唾之神云掃之神云云
云ハ或ハ入水云云出水云云其生乘る元因の有を
此の泉守道者ハ此神ハ二神ハ然る事無くして不
意ハ出たるハ他の一書ハ其出自の有を以の事ハ
熟く撰者の意ハ其久伎ハ古事記ハ自木俣漏逃而
去見え又少彦名命の事を此者實我子也於子之中
自我子俣久岐斯子也と有る其同ト事を寶劍出現章
第六一書ハ自指間漏墮者必彼矣と有り又古事記
ハ謂ゆる多途具久を祝詞式ハ谷蟻と見えたる其具
久ハ此の久伎ハ同ト崇神天皇六十年御記あり神託
の御言ハ山河之水泳御魂と見え仲哀哀天皇八年御記

△國造本紀の菊
麻園造ハ久々麻
と訓又和名抄
上總國知事市
房郡菊麻久々
と萬と有り但
今不菊と葉
小深九
△大同類聚カ
二卷カ久々回
河内回菊田大
戸首云々と有り

洞海の下に洞此云久岐と有るども皆同語あり又万
葉十七十一に保登等藝須木際多知久吉多と詠後
世の歌よ百舌鳥の草具伎多と云も然り云ハ其字音
を借たり者あり和名抄郡名に陸奥國菊多木久多と
有る同字あり肥後國菊池久と知と有り通
證は今朝鮮語菊曰久云云案ふ其訓も久と有る
可し其ハ草名ハ菊花ハ莖花云事よて技を造す
して直ハ其莖ハ花咲く者あり此草の事昔よ
り御國よて云祢ハ言き事と思捨たりハ甚遅りけ
り此ハ序よ云再借通證よ久ハ利聞切之義凡善聞而
心得曰聞切云云とも古す物を聞く事を久と云
ハ云云ハ神名式よ加賀國石川郡白山比咩神社有
信ひ難う神記ハ菊理媛命見え
り社傳よ中菊理媛命東伊弉諾尊西伊弉册尊云ハ
然も有心神考詳説ハ神書抄云菊理媛神今加賀

△和名雜神祇門
加賀白山新羅一官記
更白中社伊弉册左右
祭神菊理媛泉守
道者云々諸説
定アハ云

國白山權現是也二見え二十二社注式日吉神社條よ
引り扶桑明月集子客人形女第五十代桓武天皇即位延
暦元年天降八王子麓白山菊理比咩神也と見えたり此
ハ其白山比咩神に申すハ即菊理媛神の御事なるに
有けり然るを大鏡よハ伊弉册尊なる由見え和漢三
才圖會よハ白山大權現又号妙祭神三所伊弉册尊左
菊理媛右泉守道者元正天皇靈龜二年出現と見えたり
と就て考ふるに其白山比咩神に申して神代より鎮
坐ハ菊理媛神に坐て其伊弉諾伊弉册二神の如きハ
信子其元正天皇御代より祭り初たりる可し

此より又異説有り或書に改曆記云雷龜二年丙辰顯形
云我當山地主伊時册岳也又左峯老翁現云吾白山
輔佐也稱小白山又右峯老翁現云吾白山稱也即大己
貴乘跡也と云り此は菊理媛神隱水て見え給ハ
す且其小白山ハ神社考詳節は此の事又上祀峯値
一偉男手握金箭肩横銀弓日我是妙理大菩薩之輔也
名曰小白山大行事聖觀自在之變身也と云て彼越泰
澄と云妖僧の爲に搔晴ありて何れの神とも詳不
くざりハ可憐一き事あり此小白山と云ハ下よ云ハ
金劍宮の御事ハ非ハ然ハ素戔嗚尊ハ坐す
可又劍宮と申す有り諸神記ハ加賀国石川郡金劍
宮河内天照太神分身應現也号光明寺崇神天皇御宇
天降岳跡給也同天皇三十三年社立白山妙理權現第
一皇子也妙理權現者伊時册尊也と有り太平記二十
黒丸足羽云々の條下よ延元三年越後勢云々加賀国

は暫逗留して行末の兵糧を用意す可一こ今湊宿
よ十餘日迄逗留す其間ハ軍勢劍白山以下所この神
社佛閣ハ打入て佛物神物を侵し取り云ハ見元こ
劍白山と相並給へり神社考ハ載たる傳記ハ金劍明
神者本地俱梨伽羅不動也弘仁十四年立比官と云ハ
この例の佛と爲たる説あり據べり此劍官ハ
一も素戔嗚尊ハ御在す可一傳ハ云ハ云ハ云ハ神名式ハ尾張国愛智
郡八劍神社ハ所考林葉社記ハ依ハ素戔嗚尊ハ坐りハ
訪國伍以郡劍神社と社記ハ其神と申傳ハ又或書ハ
二社注式日吉末社ハ劍宮素戔嗚尊と有とハ思合す
可一又縁起ハ中官權現者国常立尊也佐羅早松大明
神本地不動明王也白山七社之内也と有ハ

国常立尊ハ例の思東益ク又佐羅
早松ト云事ハ何の由モ難辨一
諸白山比咩神ト申
すハ其菊理媛神の亦名ハ非ズ其地注アキ四時子積雪の
絶ざるヲ依テ白山トハ云めり古今集小消竟る時一
言ヒバ越路ある白山の名ハ雪ハ有けりト有ト以
知ベ一又後撰集小白山ハ雪降めトバ跡絶ト今ハ越
路へ人も通ハずとも有り如此云て其雪を以て山名
と成せりハ外城子雪山氷山の名有カ如一又此神社
を詠ハハ別新千載ハ菊頼ハし心も深き哉跡無初一雪の白山
又新拾遺小千早振ハ雪の白山別ト菊深き頼ハ神
不知ハむるト有り上も云る如く日吉の客神宮ハ

申すハ菊理媛神ハ渡ルを給へるカ故ハ新古今ハ日
吉の客人宮ハ詣テ左京大夫頭輔年經トも越の白
山忘スずハ頭ハの雪を哀モ見ユ續古今ハ客人宮ハ
奉けル後京極攝政前大政大臣此ハ又光を令て宿す
哉越の白嶺ハ雪の故郷ハど見えたり通證ハ石の古
今集の歌ハ引
て此ハ菊ハ異邦雪山一名白山也此山ハ而祭斯神蓋取有白
事之義ト也ト有ル水ハ也ハ神代ハの古ハ日本紀ハ有ル白事ト
書セしテ白山ハ三号ハたりハ非ズ何時ハも雪ハ也ト眞
白ハるハ也ハこハ了ハ白山ハこハ云ハたりハるハ也ト此ハ何ハの故ハ由ハり
ハ有ル文徳天皇實録ハ仁寿三年冬十月己卯授加賀国
白山比咩神ハ後三位三代實録ハ貞觀元年正月廿七日
甲申奉授加賀国白山比咩神ハ正三位ハ有テ如此ハ早

く尊位より進み給へるよ名神大社の列ありざる
 ハ異しき事あり平戸記より仁治三年四月六日今日加
 賀國白山社御祭也仍予分國司今朝早且行水修禊除
 為神事月水者出之重輕服革不入門内於魚喰者不憚
 如去年十一月但至鳥菟之類者深以禁断之社例云こ
 こ有り百練抄より延久三一云年六月廿七日加賀國白
 山御体焼損以舊体残奉籠新像之由令勘先例云事
 見えたり和漢三才圖會より本山西越前北加賀東越中
 南飛彈以跨於四箇國云こ有り別同書より越
 前國白山大權現寺号平泉寺自界山一里云こハ大
 野郡に當る可し其祭神の事と本官大御前伊弉諾尊
 金釵官瓊二并尊別官忍穂耳尊越南知大己貴命加寶
 童子火こ出見尊雖三所所祭於此五社也云り此よ

ハ其主と生ず菊理媛神あど御事見えざるあり且
 式内の社めても非るハ彼加賀の白山の邊官あど
 ヤら○亦有白事ハ先上泉守而者と以て令申給いけ
 るよ猶又申残させ給い事ハ有と此神一て令申給
 へる者あり其ハ何を令申給いけらざと此を探索
 るよ此程生出し神等有り其神等を治給ふ事を宣別
 させ給へるるけり已よ上ふも云ろ如く造化モノヲす五
 元神等の御事ハ吾與汝生己國矣奈何更末生字の御言
 して詔別け給いけらばニ神の上津國こ下津國こハ
 相離らせ給い乍も此顯國を相持たせ給ふ可き御事
 ハ御心の残る隈無く令申給へりハ此度ハ又此

間より成りし神等の因處を定めて各牽給ひしとの御
 事あり此に至りて伊特冊大神の美しき御心愈見ハ
 給へるが故に伊特諾大神の御心よ善しく聞食一
 感けさせ給へるして此は少縁に見遇し奉る可き所
 ありず若然らずハ何事と善給ふこと為し又何事
 火祭詞よ吾名妖命能所知食上津国ハ心惡子乎生置
 此来奴止宣氏と有て其下津国よ公御在し坐る後
 此此顯国の事を深く御心よ係させ給ひ次は更生子
 水神焼川菜塩山姫四種物乎生給氏と有ハ火神ハ惡
 しく惱生しよ懲させ給ひて右の四種物を被燒給ひて甚
 此能心惡子乃心荒比曾波水神靱植山姫川菜乎持
 鎮奉礼止事教悟給支と有て其御子等よ火を鎮むる
 方と教悟し給へるが如く少りも顯国の事を疎く給
 ふ御心の見えさせ給ひざり御事ありを明くめて云

先其泉門塞大神来名戸之祖神の如きハ其
 者あり
 泉門を塞へ又黄泉神を障給ふ時よ成坐つるが素よ
 り伊特諾大神よ尙奉る可き理あり次は連玉之胃神
 泉津事辭之胃神二神也然リ諸第六一書よ其泉門を
 千人所引磐石以て閉塞させ給へる後よ投其帶云二又
 投其衣云二又投其禪云二又投其履云二又其如く物
 を投給へるよ因て成りし神等有り其ハ古事記よ因
 脱著身之物所生神也と有る是ありし事の状を思ふ
 其大御身よ著させ御在て坐し物共ハ皆共ハ顯国
 の物實あり今此を脱棄給へるハ彼不禎也凶目云

ハ汚穢き魂国の垢ハ甚く穢少き世給へるハ故あり
然るハ此物共ハ因て成りし神等ありハ顯国の神ニ
も泉国の神とも未定くざる者ありと雖も此ハ
其物實よりハ汚穢の方主と成りし故ハ泉国ハ属心
キ神あり然れども顯国より成出たり其因方定くず
して甚漂在しく多し有けども菊理媛神ハ令申て其
泉国の方へ属し取ら給ひしと申させ給へるハ
有けり其神等の事記記共ハ得たり所得ざる所
各其書ハ耳^{スガ}継りてハ其分明く有るハ此を以て
傳^ニ百^ニ百^ニ五^ニ十^ニ五^ニ丁^ニハ委曲ハ此を正し云る如く其授

棄給ひし物共ハ依て成りし神併せて九神あり其中
ハ時置師神煩神閻嚙神ニ神ハ謂ゆる疾病神あり次
ハ奥疎神邊疎神奥津那藝佐昆古神邊津那藝佐昆古
神奥津甲斐辨羅神邊津甲斐辨羅神六神ハ謂ゆる禍
害神あり故此九神を其成出たりし元因ハ依て
取めし事を申させ給へるハ其大神の所知食す上津
国の事を思ひし食す美し御心より出たりし者
リけり然ハ有るハ顯国より生出たりし神ありけ
其ハ岐神^{トバ}彼泉^申ハ亦引取給へる者あり可し是を以て
く菊理媛神ハ岐神ハ一神ありし事をも思合す可
然ハハこり根国底国^里與^鹿備^疎備^来物ハ有るハ

是故此は菊理媛神に託て如此く令申給へり其美
しき御心有りと云ハ其泉門を塞たり後ハ然る神等
の成出たりし事を知りて上津国の事を御心本無く
所思るりし御事にて其を菊理媛神をして令治め
其事の極と至りて根国底国に還し却給へとの
御心を合て令申給へり者るけり其泉守道者ハ
泉門塞大神とて謂ゆる八衢比古八衢比賣神と坐し
菊理媛神ハ久那斗神と御在せると以思ふは道饗奈
の起ハ此時伊弉諾伊弉册二神也然る御契約は始と
る者るけり予先ハ祝詞講義を書たりし程ハ未此
所迄ハ思氣の及ぶざりし故ハ唯大

国主神の事始のて天神子申上給へると天神より皇
御孫等と授給へり者と耳思ひし未深りし程ハ未此
り其ハ詞ハ大八衢ハ湯津磐村之如ハ塞坐皇神等之
前申久云ニ根国底国^奥麓備^備来物^ル相掌相口
會事^云云ニ有^也も第六一書ハ所見たり如く
彼泉津醜女ハ被追させ給へり程の云この事ハ依
て千人所引磐石を以て泉門を塞がせ給へり其国
の鬼魅ハ一も顯国ハ出べき所をめぐりて彼詞より其
事^{ウツ}を轉^ルり大八衢^云云ニ有^也ハ心を着て考ふらり
右の根国底国^奥里云ニ云物ハ決^ル其顯国ハ成て根
国^底ハ属^ル右の九神と首領^ハとして其部類^ハ云ハ又其

其の唯菊理媛神の
白事耳なりすや
泉守を白事
云ふ合せて聞食
一諾せ給へる
るり

等の爲よ其塞神等ハ大八衢ノ湯津磐村の如く塞リ
給ふも有ける故此ノ菊理媛神をして令申給ひけ
るハ石の事共を合せて其を避ぐ神を以て然契約り
給へりよ多し有けり然水ハ此一段ハ全く泉門の戸
外ありて成りし神等の事と其
伊弉册尊の御自の御方ハ屬て其を岐神等ハ令治給
ふ事とるるより外あり思合す可き事なきを人ハ如
何ノ説かしく甚し
呀ハ一ノ事多し
○聞而ハ伎許斯米斯氏ニ訓り常
よ聞こ云ハ唯耳ハ入て心ハ識るを云を此あり入
の云ふ事と甘多し聞給へりりて先ハ聽字の意あり
所々ノ宝鏡開始章ハ於是天兒屋命云々而廣厚稱_祈
啓矣于時日神聞之曰頃者人雖多諾未有若此言之麗

美者也乃細開磐戸而窺之又古事記ハ於是八上比賣
答八十神言吾者不聞汝等之言將嫁大穴牟遲神を
見えたり聞即是る祝詞式ハ大祓詞ハ如此乃良
波天津神波天磐門手押披氏天之八重雲字伊頭乃千
別_系千別_系所聞食武国津神波高山之末短山之末_系
上坐_系高山之伊穗理短山之伊穗理字撥別_系所聞食
武_系有を始こして多き語なり此も本其耳ハ聞くよ
て一ありども今俗言りし唯物を聞くこ又事を聞て
諾ふ事をも聞く聞りぬと云類と二子用い分つ事る
等一○善之ハ富米多麻比ニ訓り名義抄ハ善字を與
斯とも與美須とも富牟とも云り此ハ伊弉册尊又

泉守通者之訛て全事

菊理媛神を以て白事を伊弉諾尊の聞食して賞給へ
 るるり聞而善之と云ふ此の續き彼續紀第一詔に故
 如此之状予聞食悟而歎將仕奉人者其仕奉礼良状隨
 昂二讚賜上賜治將賜物曾止云云有以たり伊富承
 ハ秀所見ホミめて人の善事を擧げ云ふ語あり古語拾遺
 天石窟既其物既備云云令太玉命稱讚ホミと見え又善
 言美詞コトヨキコトの善をも富米と訓せたり此ハ神武天皇御
 紀ハ長髓彦即取鏡連日命之天羽二矢一隻及步敷以
 奉ニツルホノミ有ハ右の拾遺ツルヒたり稱讚と同トく稱辭の類
 り可一又鏡連日命云云今果立忠効則褒而寵ホメ之る

も有り万葉二十一丁ハ麻氣波之良實米氏亘久禮留
 等乃能其等云云有し祝詞ハ下津磐根ホ宮柱太敷
 三高天原ホ千木高知氏云云二二稱辭するを指て實米
 氏と云るる又名義抄ホ譽尊をも富米と訓り宿富
 顯見ゆるを賞て云言めて曾志流の反るる曾志流ハ
 退後の意ありて入を退け貶す義あるを又思合す可
 ○散太矣ハ阿良祁坐伎ニ訓べし此ハ女神の御言ハ
 不可共云と宣い其別處を建て御在し坐乍も此顯目
 を相持たせ給ふ神量の己も成て大事此ハ意給ひけ
 水ハ其伊賦夜坂を避て本宮ニ還るを御在し坐す事
 と云るる阿良祁ハ今も俗ハ物と相離るると云ふ是

且曰ト字鏡集名義抄共ト散字を然訓たり古言る
 但出雲凡土記楯縫郡佐香郷の下ト解散の字有し此
 も同ト訓心キ所あるケ如くあるト下ト故云佐
 香ト有ト結びて其ハ佐加理ト訓べト但其上文ト令
 釀酒ト見えたとト佐香ハ酒ト依ル者ト又其故
 給へト事ト甚トウリけト故ト其解散を以ト佐香ト
 云けト思トキ事ト上ト己ト云ト如ト又字鏡集ト
 繩字を阿良那波ト有リ其ハ其絞ト麿キト依ル
 名ト多ト可ト又舊事記ト異妹を阿良未伊モト訓
 凡ト河良基ト云事ト其間遠ト云
 凡ト河良基ト云事ト其間遠ト云

但親見泉國此既不祥故欲
 濯除其穢惡乃往見粟門及

速吸名門然此二門潮既太
 急故還向於橘之小門而拂
 也于時入水吹生磐土命出
 水吹生大直日神又入吹生
 底土命出吹生大綾津日神

ニタ イリテ フキナミタニ アア ツキノミコトヲ イテ、 フキナミタニ オホ

又入吹生赤土命出吹生大

地海原之諸神矣不負於族

此云宇我邏爾磨概茸

但云ニハ上ノ聞而善之と有る其ハ其ヨリて其事ハ
ラ_の想てハ御親彼穢き泉國ノ往坐ノ命ヲ御上ノ取
て不祥き御事あるガ故ノ其意を及_レて述_レる所あり
故此小但と云リ○親ハ御を添_テ美ニ巨加良ニ訓_ヘ

ト傳十百ハナミ云リ○見泉國ハ上ノ追至伊特丹等

所在處ニ有_ル應_ヘて書_セる_ルて_テ所_レ不_レ聞_セたり文

ある事上_ト五_ノ註_ルガ如_ク此明文有_リ依_テ第九一書

み_レ到_リ殯_ニ之_レ處_ニ有_ルど_ハ非_ニぬ_レ傳_ル事_ノ自_ラ然_ルト曉

り_テ可_ク者_{アリ}者_{アリ}諸_レ此_ハ第六一書_ノ既_ニ還_ル乃_チ追_テ悔_フ曰_ク吾

前_ニ到_リ於_テ不_レ預_セ也_ハ凶_ニ目_ヲ汚_レ穢_ス之_レ處_ニ有_ル富_ミヨ_リ見_ル泉_國
の_レ見_ルハ_レ到_リの_レ意_ヲ有_ル○不_レ祥_ハ傳_ル六_ノト_ハ云_リ○穢_レ惡_ニ
ハ_レ第六一書_ノ故_ニ當_テ滌_ク太_ニ吾_ノ身_ノ之_レ濁_レ穢_スニ_ハ有_ル濁_レ穢_ス同_シ
ト_ク祈_ヒ賀_シ良_ニ波<sub>志_イ伎_イ母_イ能_イニ_ハ訓_ル其_レ然_ル可_ク神_祇令_メ之_レ
不_レ預_セ穢_レ惡_ニ之_レ事_ニ有_ル義_ヲ解_キ謂_フ穢_レ惡_者不_レ淨_之物_鬼神</sub>

今古に此と淡路門
 古事記曰代官使
 此之御世定東
 水門と云い西なり淡
 水門と對して殊更
 東之に云うと思ふ
 可一諸此粟門ハ

と有る穢惡し唯祈賀禮を再訓て事足る所あり
 傳十三百九十七丁 小云事共考合す可一〇祥見
 記傳引けたる由伎美多麻布と續けて訓水た
 る下之邊向と云い對へて書水たる者事由有る事あり其下云こむ
 〇粟門公阿波国板野郡と淡路国三原
 郡との間合アハヒに在る門ありて古より世々名高き阿波
 の鳴戸と云る是なり仙覺が万葉抄二巻より引る風土
 記より午夜戸と云るも此鳴戸を云ふ不有い其ハ右の
 鳴戸を阿波よりの渡口ハ極養と云い淡路よりのを
 福良と云いハるゝ土佐日記より夜中許より船を出して
 阿波の水門を渡り夜中ありハ西東も見えず男女幸

く急ぐ神佛を祈りて水門を渡りぬ寅外時許り野嶋
 と云處を過て云こ見えたる阿波の水門と云ハ四
 国より淡路へ沖より渡り處ありて此の鳴戸の迫門る
 る所よりハ南方より寄たる方ありども同ト鳴戸の潮
 路るゝが故ト同ト状よりトハ流るゝか如く荒
 鹽の溜巻て甚可畏き瀆ツあり有けまが右の如く神佛
 を祈りて稍くよ幸ありて野嶋より渡りけるあり可
 一諸其野嶋ハ淡路国三原郡に在る小嶋よりハ万葉一
 十上吾欲之野島波見世追と詠る是なり太平記十八
 御息所鳴戸と波給上條ハ阿波の鳴戸を通る所幸ニハカあり

よ凡變り潮よ向いて此船更よ行遣はず云々斯る所
 よカンドリ楯取一人船底より飛出て此鳴戸と申すハ云々龍
 官城の東門よ當りて候間何々とも候へ龍神の欲
 りて給ふ物を海へ沈め候ハねハ何時も箇様の氣
 き有る所よ候々有て龍官城の東門よ當らるる云
 ハ物速るげらる事よ西よてハ速吸名門東よてハ
 此粟門の二處耳謂ゆる根国底国へ潮の流落る戸
 なる古説きあるありと訛傳へたる者あり可上伊特諾大神の本
 官磯取盧嶋より出立給いて其御濯除の事よ就て
 到給い其最初の所あるハ必然る故申よこり有つ

通 通聲ハ何彼津記ハ北有鳴門之急難逆流暴浪
風疾雷奔即海若之所産と有り予ハ一度船よて
 渡り見たるハ信よ天下の内ハ斯る所ハ有けりと胸
 動りく迄よるハ有ける其渡口なる福良ハ内海よて
 其ハ鴨戸の市ハ山岬半里餘りも出て阿波国の方
 よてハ大宜山云々相對へハ其間僅ハ十町餘りハ
 過さる可ハ朔望の頃の大潮ハ其潮の落る所龍の
 如く階有て見ゆ空飛ぶ鳥も其上ハ難過ハ爲めり其
 渦巻く音あり千萬の雷の一時ハ落るハ疑ハた
 實ハ鳴戸と云名違ハざりけりと甚恐くあり見えた
 一〇速吸名門ハ神武天皇御紀ハ速吸之所と作ら古
 事記同哉ハ速吸門と有て名とも之とも書ハざると
 思ふよ名ハ之の辭の連聲ハ引りて轉るるありけり
 其速ハ其湍の疾きを以云めて次ハ潮既太急と有ガ
 如ハ同御紀ハ到難波之荷會有奈潮太急上因以名爲浪

連國と見え大被詞と高山末短山之末與佐久那太理
亦落多支都連川能瀬生ある有る連是る吸其潮
 を根国底国の方より吸入るを云て同詞と荒鹽之鹽
 乃八百道乃八鹽道之鹽乃八百會亦座須速開都比咩
 止云神持可二吞氏如此久可二吞氏云云見えたる
 可二吞ハ即吸ハ同ト然ルハ速吸ハ速可二吞云云
 ハ如シ祝詞考ハ可二ハ水を吞む音なり想て物を吞
 嚙しるハ云類多し百葉十四ノ筑波祿ル可加奈久和
 之能云云と詠るも鳴聲ハ加賀ニ聞ゆ云云
 二有る後釋ハ詠先其地理を定む可一神武天皇御
 ハ云たる是なり
 紀ノ天皇東征親帥諸皇子舟帥東征至速吸之門云云

臣是国神名曰珍彦釣魚於曲浦云云往至筑紫国菟狹
 と見えたる菟佐ハ豊前国宇佐郡あり其国ありハ南
 の竟多しハ曲浦速吸名門共ハ豊後国あり車崎者
 あり其曲浦ハ通證ハ豊後国海部郡佐賀關下浦有地
 主神稱珍彦官祭珍彦云社説曲浦為上浦云云和名歌神名佐
 加と云る是なり然ルハ速吸名門必其邊あり可一神
 代ハ説ハ速吸名門在豊後国海部郡と云るハ然る言
 多し神名式ハ豊後国海部郡早吸日女神社或説ハ速
 秋津比賣神今在佐賀郷と云り国人の云ハ今佐賀
 關の早吸六柱神又六柱大神宮と云ハ早吸神社ハ

其速吸名門云云
 早吸日女神云云
 其地各依て居坐
 由有る神子集りて
 續後記云云
 九月甲辰豊後国益
 位早吸日神奉後
 位五位下三式實録
 元慶七年九月二日
 後豐後国位五位
 下早吸日神正位
 位下云有り。

非ず海部郡佐伯莊入津浦之富社有り入津之官浦
 ハ雙いたる浦なり 借其早吸神社の坐す地より下流
 江浦云云沖より佐賀國迄早吸灘と昔より
 里人も舟入も云傳へたり然るに早吸日女神社の右
 の入津浦なる事明しけし云り此より少り論し有
 ることも先心留め置へば然るに古事記白檮原官段に
 ハ即日向發行御筑紫故到豊国宇沙云云於筑紫之
 岡田宮一年坐云云於阿岐國之多祁理宮七年坐云云
 於吉備之高嶋宮八年坐云云有る此迄は速吸門云云名
 云々して其次は故從其国上幸之時乘龜甲爲釣舟亦

羽擧來人遇于速吸門云云故從其国上行之時經浪速
 之渡而云云有て吉備より浪速に到りて給ふ迄の
 中途の事と爲るハ決めて文の錯乱する者あり其ハ
 速吸門ハ其上幸坐る海邊より國ハ非ざる其文
 と兼て故從其国上行云云云ハ佐の例とも違へ
 ハ此に於て其錯乱する事を表はせる者あり然るに
 其文ハ何れも在べきものと云ふ此ハ決めて上文より
 日向發行御筑紫故從其国上幸之時乘龜甲云云故
 到豊国宇沙云云云云文を成し下ハ於吉備之高嶋宮八
 年坐故從其国上行之時經浪速之渡と列ぬ見らる過

不及^{ナラズ}並^{ナラ}く整へり但自日向發幸御筑紫日向より
出立^デて筑紫の方^ハ指^シて行て給へるあり其^ノ上
ハ少クも妨^ガ無^ク然^レも彼記の傳^ハても速吸門^ハ日
向より豊前^ニ至^リ問^フるも豊後の地方^ニ有^リ
けり記傳十八^ニ神名帳^ニ豊後国海部郡早吸日女神
或人豊前の早^ノ浦^ノ事^ハありしと云^フり實^ニ潮^ノ速^キ
事^ハ名^ニ負^ヒ水^ト儲^ハ甚^ク地埋違^{ヘリ}此一段^ノ事書
紀^ハ日向^ニ發^シ坐^シて免^テ狹^ク至^リ坐^ス前^ニ在^リ此記
ミ次第^{異^ル}故^ニ思^フ此地名^{正^シ}豊後国^ニ在^リ
バ書紀^ノ傳^ハ正^シり可^キ吉備国^ノ難波^迄の間
ふ^ハ此地^名有^リ事^ヲ聞^クず此記^ハ此一段^ノ次第^ノ
乱^レつる可^シ云^フる信^ニ見^レ儼^ニたる説
云^フ者^{多^ク}其早^ノ浦^ノ事^ハ傳^ハ十卷^{四百}十四^丁又序
有^テ云^リ同^一潮^脈あり有^リ水^も速^吸名^門ハ非^ズ
此^ハ古^ノ穴^門ニ云^フ所^ヲ思^ヒ混^ル事^分を辨^ス次

正^ニ行^ク諸^上云^フ國人^説早^吸灘^ト云^フを以^テ
必^ズ速^吸名^門ハ其^{多^ク}も定め難^クリ其^ハ灘^ハ洋^ノ
字^ヲ書^キ船^ヲ寄^ベき津^湊多^クの無^キ所^ヲ云^フ固^ク
より水^門ありて無^キあり然^レも其^ハ速^吸名^門
は續^キたる洋^{あり}故^ニ早^吸灘^ト云^フあり有^レ
け^レ神社^ノ所在^ハ其^間も瀟^々も早^吸ニ云^フ内
あ^らば有^らば強^テ抱^クるもト^クや有^レ古^事記^ハ生^女
嶋^亦名^謂天一^根有^レ記^傳五^丁豊^後国^直入^郡
の東北^ノ海^ノも姫^島有^リ云^フ是^{あり}傳^三
七十^丁己^ノ註^々如^ク其^天一^根云^フ彼^葦牙^ノ如^ク

く萌騰りて天に成り根と云事あり一と云らば此一
物の根より天へも成りし由の名に聞えたるは先
此の眼を著べき所ありし有けり然らば此を首と
て右の早吸灘に至る迄の急湍あり古に速吸名門と
云り一所ありて有べきなり其姫島より北國防長門豊
前の海を伊波比洋と云らば其御身條に幸生し車の
由に在べく郡名を直入と云も亦其謂有べきなり又
其姫島の南豊後の方へ右に謂ゆる早吸灘なり早吸
日女神ハ又其水門に就たり神あり車上と云るは和
名秋郷名海部郡佐加み並びて穂門郷と云るは有も師

の赤縣太古傳に速吸名門ハ大地の陰門に當りて彼
に謂ゆる云北之門是なり由と云とたふ打合いて旁然る所
以有る靈所とあり聞えたりける傳中十一豊国主尊
の下に註る事共をも亦考合して其然る所由を曉る
可然地とも界と立て号くる如く思ふは愚なる事なり
可可謂ゆる鳴戸の事ありと土佐日記に云るは其よ
り十里許り又佐賀関と伊豫との間阿波の水門を渡
るも追門にて潮の速き所あり由と云らば其も同し速吸
名門の水脈あり車と云るも更なる然るも姫島の追門
を本と云るは諸被處神ハ一と第六一書又此一書の趣
よりハ橘小門にて生する神に生はる更し此より異

義有^カ非ず然^カ水^カとも右^カ引^カ大^カ後^カ詞^カの如^カく^カ其^カ神
等の直^カ處^カハ此^カ速^カ吸^カ名^カ門^カよ^カて有^カり^カけり釋^カ秘^カ訓^カ小^カ神
武^カ天^カ皇^カ御^カ紀^カの速^カ吸^カ之^カ門^カを美^カ那^カ斗^カ逆^カと訓^カひ^カき秘^カ説^カを
載^カたり^カの穿^カ六^カ一^カ書^カハ水^カ門^カ神^カ等^カ號^カ速^カ秋^カ津^カ日^カ命^カと云^カふ
合^カひ^カ右^カの早^カ吸^カ日^カ女^カ神^カを速^カ秋^カ津^カ比^カ賣^カ神^カる^カ由^カ云^カふハ
社^カ傳^カる^カ可^カき^カ其^カも相^カ叶^カへ^カる^カを思^カふ可^カし速^カ開^カ都^カ比
咩^カ止^カ云^カ神^カ持^カ可^カニ吞^カ氏^カと速^カ吸^カ名^カ門^カと云^カふ其^カ義^カ等^カし^カ
事^カ上^カよ云^カふ^カみ^カて^カも灼^カ然^カり^カる^カむ大^カ被^カ詞^カ後^カ釋^カ速^カ秋
津^カ比^カ賣^カ神^カハ古^カ事^カ記^カハ水^カ戸^カ神^カと有^カと此^カハ鹽^カ乃^カ八百^カ會
尔^カ座^カ須^カハ處^カ違^カいた^カと^カども此^カハ深^カき由^カ有^カり其^カハ鹽^カ乃

八百會ハ顯^カ國^カの海^カ上^カの擧^カめて根^カ國^カの方^カへ潮^カの没^カ往
く門^カ口^カと^カども此^カハ又^カ彼^カ方^カの水^カ戸^カる^カり常^カと云^カふ水^カ戸^カハ
川^カより海^カへ水^カの落^カる^カ口^カ鹽^カ乃^カ八百^カ會^カハ海^カより入^カて根
國^カの方^カへ水^カの出^カる^カ口^カと^カども此^カ方^カより川^カより出^カる^カ處
と彼^カ方^カへ出^カる^カ處^カとの差^カこ^カり有^カと共^カよ同^カト^カく水^カ戸^カる
る古^カ傳^カの趣^カの妙^カる^カ事^カ如此^カハ能^カく味^カふ可^カしと云^カふ
た^カる^カを思^カ合^カせて曉^カる^カ可^カし然^カと^カども彼^カ處^カ神^カ四^カ柱^カの解^カ除
の妙^カ用^カを成^カして天^カ下^カの罪^カ穢^カを清^カめ御^カ在^カし坐^カす本^カ處
ハ此^カ速^カ吸^カ名^カ門^カよ^カあ^カひ^カ有^カける但^カ今^カハ其^カ早^カ吸^カ日^カ女^カ神^カの
速^カ秋^カ津^カ日^カ命^カハ御^カ在^カし坐^カ
す其^カよ依^カて説^カを成^カせ^カる^カり有^カれ餘^カの神^カも同^カト
く相^カ共^カよ御^カ在^カし坐^カて御^カカ^カを合^カせ給^カふ事^カ推^カて知^カへし

其神等の本説ハ傳十卷ヨ云ク又此速吸名門
の事の委曲なる由ハ大後詞講義ヨ委一ノ説記セシ
バ今云ゾりる必しも此ヨ
盡セリと思ひ取る事勿ル
○既ハ常ヨ以前ヨ在テ
過ル一車を云ヒ此ヨ異メテ此ハ盡^{コトク}の意あり万葉
十七^{十三}丁 ヲ天下須泥ル於保比底布流雪の云ニ有
と同トク此一格あり此ヨ汝己見我情又吾與汝己
生國矣又但親見泉國此既不祥^極なり有トハ別あり
但其等も車を悉^盡して^極後^極の車を云ふとバ終ハハ
一車ニ成ぬり此の格^格多^多在りぬ可キ事
ト^ト今云^今こと物^物ト既^既ハ棄^棄去^去メテ其ハ
分別^{分別}する如^如キ辞^辞あり
○太急ハ速吸名門の名ヨ對^對
テ應^應へたる語^語あり上^上も引^引る神武天皇御紀の文ヨ

會 有^有奈^奈潮^潮太^太急^急因^因以^以名^名爲^爲浪^浪速^速國^國之^之有^有ト前後^{前後}の差^差ト
すハ有^有けれ目^目ト例^例格^格あり所^所あり太^太疾^疾の説^説傳^傳十^十卷^卷ヨ
出^出三百^{三百}十^十 ○橘^橘之^之小^小門^門ハ第六^{第六}一^一書^書ヨハ小^小戸^戸橘^橘ニ云^云い
海^海宮^宮遊^遊行^行章^章第^第一^一書^書ヨハ橘^橘之^之小^小戸^戸ト作^作りたり神^神功^功
皇后^{皇后}御^御紀^紀又^又古^古事^事記^記るるヨハ之^之字^字無^無一^一此^此ハ筑^筑前^前國^國那^那
珂^珂郡^郡薩^薩河^河の^の水^水源^源ヨ當^當る事^事己^己ヨ傳^傳十^十二百^{二百}九^九 ヲ云^云リ
還^還向^向ハ字^字の如^如ク還^還理^理向^向比^比給^給比^比氏^氏ト訓^訓へ一^一本^本ヨハ向^向
字^字の訓^訓無^無ト^ト也^也唯^唯還^還トセ給^給へるヨハ非^非ず還^還トセ御^御
在^在一^一坐^坐トモ往^往向^向ハセ給^給ふ所^所有^有る 唯^唯還^還トセ給^給ふ
有^有ぬ可^可りけ^け且^且此^此ヨハ向^向字^字ヨ用^用有^有テ書^書水^水たる所^所ヨ
て還^還見^見又^又ハ還^還来^来又^又ハ還^還往^往と^と字^字を添^添るカ如^如ク

○日本書紀傳十三

○百

通説より引り谷直遠説より細考言還向則此橋之小門似
 指在筑前国那珂郡者更詳之云云ハ其愛しき説
 て實よ然る言ありけり其ハ傳十二百八十一引り私記
 よ住吉大神の御事ハ執て又問今如此文者此三大神
 者當在筑紫橋之小戸而今在撰津国、墨江如何答
 此神荒御魂者猶在筑紫但和魂獨在墨江案神功皇后
 紀云元年三月皇后親為神主於是審神者曰云ニ對云
 於日向国橋小門之水底所居而水葉稚之出居神名云
 ニ時得神語隨教而祭之然則此神本在筑前小戸即神
 功皇后初遷居於撰津墨江耳之見えて神功皇后御紀

よ日向国橋小門ニ有る筑紫橋小戸と筑前小戸と
 も云ふ古説如此く詳小在り後日向凡土記ハ兒
尊掃清汚濁給住吉神所出之所也云ニ又橋小戸郷是
即伊特諾尊神潮汚濁之地也云云云云云云云云云云
の杜撰者ありて筑紫日向を日向国ニ僻心得て取持
へたり者あり事傳十卷ニ百八十三丁ハ委しく辨た
るが如し和名抄を見たり然り郷名一として有る
事益きを思ふ可し且風土記ハ其国の古説を記す抄
あり故ハ文字通も何れ正史ハ依りすこと又一風
有り者ありを右の文ハ親也此御紀ハ全く絶りて書
るも亦疑ハ一備此ハ但云云云有と口訣ハ歸本處而
と事ありずや
 爲此言也云有ハ然り言めて上あり云々如く出雲の
 伊賦夜坂より淡路の磯取盧嶋の本處に歸りて御在
 一坐て後ハ其穢惡を濯ぎ除はむと思ひ一成給へる

あまの其處より出立し御在し坐むし其徴取盧鳴ハ
同書ハ在淡路西北隅ハ嶋也ニ有テ今来馬郷岩屋浦
ニ云ク是あり其粟門ハ淡路の西南隅ハ當りて三原
郡阿萬郷の邊なるを先此ハ往見給ハ其より河波護
岐伊豫を経て其相對へる国ハ豊前豊後の二国なり
けしハ此ハ渡給ハて其速吸名門ハ往見させ給へる
なり備此ハ還向ニ有ハ其速吸名門を往見給へるを
限ニして其より還らせ給へるあり然れども其本處
ハ還らせ給へるハ無く橋之小門の方ハ又更ニ出
向らせ給ふハ故ハ還向ニハ有るなり然れ筑前も日向も

豊国を同トク扱ヒたり国ハ有ルも日向ハ甚ク
南方ハ遠ク離ルテ有ルハ若其よりしハ往見とリ
往向と云ずしハ相叶はざるを筑前ハ其豊国ハ
殊ニ親しく隣りて有グ上ハ速吸名門も稍南寄りた
る所あり有るハ其より^{淡路}北方今ノ豊前の邊を経て還
くて給ふ事あるハ故ハ其より向らせ給へ給ひハ
筑前の方甚近く同ト一國ニ云べき地あるを思ふ
可し然れハ上の往見ニ此の還向との間ハ深き味有
る所あるハ此所をたし解得たらしハ橋之小門を
今ノ日向国ハ在りや有らずやの論も何と無益ある事

△三ノ主云神根国底
之國氣吹

比續後紀ノ彙和八年八月辛丑以土佐国石土神預官
社ニ有る是る凡て同ト神ニ雖も其国ヨテ傳來ト
スバ訛トスルモ何モ其任
ヲ名ヲ以テ官帳ニ載ルニ
スル者カ
小指置水たる者○吹生ハ
解除ノ方ト有る事
ヨテ甚美タリ其ハ傳三百四
十五丁ヨモ云々ヲ稱言ハシ
先大夜詞ヲ天津神波云ニ所聞食武
国津神波云ニ所
聞食武如此所聞食武
波云ニ天下四方国
波罪止云布罪
波不在止拜戸之風乃天之
八重雲吹放事之如久朝
之御霧御霧朝風夕風乃吹掃事之如久ニ有テ
此ハ譬言ヨテハ有ルども天神地祇ノ聞食一テ其罪
穢ヲ掃除ウセ給云云云々有るまハ實事ヨテ有る若テ

其末ヨ至リテ瀬織津比咩止云神云ニ速開都比咩止
云神持可吞氏如此久可ニ吞波氏氣吹戸坐須氣吹放
氏如此久氣吹放波氏根国底之國尔坐速佐須良比咩查
云神持佐須良比咩氏有テ此氣吹主神ノ御業ノ始終
ヨ直リテ少間物スナハ無マ心ヲ著心キ車リ有リ又此起
六ノ書伊時諾尊曰我所生之國唯
有朝霧而薫滿之哉乃吹撥之氣化為神云ニ見えタル其ハ本著テ行
ハセセ給諸此ハ神等ノ生坐ル其大御身ハ水ヲ
濯ギ清ノサセ給ヒ又其汚穢ヲ氣吹掃ヒテ給ヒ愈ニ
益ト清ニ成給ヘル隨ヒテ次ニ御子神等
ノ顯ハ出給ルハ全ク其事ハ因リテ故ニ此ヲ解

除の專要と有る事ありと云る。又此事は因て其
 生坐る神の中、神直日神大直日神と氣吹戸主神と
 御名は負坐るハ然り所由は依て其速吹名門ハ御在
 して天下の罪穢と氣吹放り御在ハ坐す御事ありバ
 吹生と云事實ハカを入て思ふ可き所あり者あり
 古史徴より古事記ハ所成坐と有を棄て此の吹生
 云方を取らば其説ハ吹所成坐と云ハ何處
 如何状ハ成坐と云事詳らぬを吹生と云方
 詳よ彼穢を後ハいと所思ハ疑ハて生坐る趣能通
 元為直其禍而と有るも孰符へり云ハ云ハた
 其説ハ同トりて趣も有らば吹生の方を取
 於てハ等一 ○出水ハ第六一書ハ浮濯於瀬上と有を
 古事記ハ其と於水上滌と見えたり是なり ○大直

日神第六一書ハ次將禰其柱而生神號曰神直日神
 次大直日神と見えて八十柱津日神大柱津日神ハ對
 いて共ハ二神なり古事記も亦右ハ同ト然りと傳十
 三百三ハ己ハ委曲ハ註らば如く此ハ鎮魂祭とハ
 十六下
 大直日神一柱耳ありハ生坐りハ其始一神と渡
 せ給ふ故ハ氣吹戸主神と申すハ名るども一神ハ
 て負坐るありゆども其守護とせ給ふ御事あり事
 繁く坐す御時ありハ神直日神と分身ハ給へるか故
 二神ハ傳ハとあり可き此例猶多き事と有る
 古史徴ハ亦名と定らばハ委ハ本ハ如
 二神ハて置て其義を存ハ可き者あり海神等篇

男神等ハ各三柱ノ成生也トモ合せて大御津見神監
筒老翁ニ申す例有リ又天石門別命ハ一柱ノ坐を
柳磐婦命豊磐婦命ニ神ノ分坐一己貴命等ト
ハ其和魂神荒魂神ニ三神ノ分坐天下を經營ス
セ給ヘリ事ト ○底土命ハ口訣ニ底筒男命也ト有
有け者トヤ
カ如ク此神ノ事傳十三百ハ十五丁ハ云リ ○大綾津日神ハ
在津日神ノ亦名有リ古事記ハ大屋毘古神ニ云神名
の出たスを此神ノ當て記傳五三十丁ハ此神ノ大綾津
日ノ當る由ハ大綾ノ阿トき省きて大屋ト云ハ古語ノ
常有リ 継体天皇ノ皇女若屋即女ヲ書記ハ稚綾姫
ニ書リ大綾トモ即意富夜トモ訓ヘ一津例ノ助辞
多トハ固リ省きて云ベ一 倭此綾ハ禍ノ意トテ語

も通へり河夜麻都河夜牟流る等の河夜又障る事の
有を俗ハ河夜の有ると云い又ハ和夜久者ると云ふ
皆禍の意ありと云はたらハ然る言あり但枉津日神
ハ女神ト云半ニセバ古字ハ賣ト誤トる若ハ何
の異ありとも有ベ一 其ハ古事記ハ本國之大屋毘
一書ハ素戔鳴尊之子曰五十猛命妹大屋津姫命次
津姫命ト見え第四一書ハ稱五十猛命云ニ即紀伊國
所坐大神是也ト有ハ大屋毘古神ト申す其五十
猛命ト坐セハ長寛勅文ハ伊謝那支命娶惠乃女
命生大夜之女命次足夜乃女命次若夜女命三神此大
夜之女命熊野大神神后坐云ト有ハ似たり神名
トハ有る其事實トハ口訣ハ己ハ此を即八十在津
於てハ難信キ事共々
日神ト云リ 倭第六一書ハ便濯之中瀨也因以生神號

曰八十柱津日神次大柱津日神と有て古事記より此
二名を並べ載りて神直日神大直日神と對へり然
らば此より並日神をも一柱と一柱津日神をも一柱
と傳へたり一者あり車右より大直日神の下より云ら
か如し然れども大直日神より後より此神名の出たり
ど其序の違へる者より第六一書及古事記の委
きよ如やうあり此は甚く車略たる傳より有けり三
代實録より元慶三年三月九日授下野国正六位上綾都
比神從五位下と見え但若くは別神とて御在り坐
所造天下大神命議坐神魂命御子綾門日女命坐時女
神不肯逃隱之時大神伺求給所是則此郷故云宇賀

と有れば強し何れも定む可なりと云らば神名式より
載り下野国十一座の中より都賀郡大神社と大物主
神あり車命を授ず村檜神社と出雲凡土記より神門郡
朝山郷神魂命御子真玉若玉之邑日女命坐之時所
造天下大神大穴持命要給而每朝通坐故云朝山
と有と若くは同神と大前神社と芳賀郡と有て
共より大己貴命あり社傳あり河内郡二荒山神社名神
大ハ一宮記と味耜高彥根神と云い那須郡温泉神社
三和神社寒川郡胸形神社有て十一座の中より八座は
大己貴命及其御族の神等より坐を思ふ其或外の後
都比神より思ふ○志土命ハ中筒男命中より由口歌小
めり其竟傳十三百八十八下
云り其竟傳十三百八十八下
採睡盡世中盡不得物戀在と有が如く此国土の限を
云稱あり所造天下大神の御名を大國主神と申奉る
も此国土の限りを惣て主領く意ありが故より古語拾

又之四
海原之真津
紀乘

爲り又万葉五^{三十一}丁^十宇奈原能邊尔母奥尔母神巨麻
利宇志播吉伊麻須諸能大御神等六^{三十三}丁^十小海原之遠
渡字七^{三十三}丁^三小海原之道遠鴨十一^{三十三}丁^三小海原乃路尔乘哉
十五^六丁^六小海原尔宇伎祢世武夜者又^九丁^九宇奈波良字許
藝豆天和多流又海原字夜禰之麻我久里又^{二十}丁^{二十}宇奈
波良字安我古非伎都流二十^{十九}丁^{十九}小海原字等保久和
多里豆又^{三十四}丁^{十四}宇奈原尔霞多奈妣伎あど海を海原と
云る例猶心^一流^二又^{二十}卷^二伊蘇尔布理宇乃波良和多
門^三も云る^四如^一又^二和多能原と云り^三る^四古今
集^五和多能原八十嶋係て擲出ぬ^六云^七是^八る^九其^十も
海^{十一}を^{十二}宇^{十三}義^{十四}と^{十五}和^{十六}海^{十七}宮^{十八}遊^{十九}行^{二十}章^{二十一}第^{二十二}八^{二十三}一^{二十四}書^{二十五}小^{二十六}女^{二十七}久^{二十八}居^{二十九}海^{三十}原^{三十一}
多^{三十二}も^{三十三}云^{三十四}故^{三十五}あり

之有る此を海宮を云あり 儲身六一書子沈濯於海底
因以生神號曰底津少童命次底筒男命又潛濯於潮中
因以生神號曰中津少童命次中筒男命又浮濯於潮上
因以生神號曰表津少童命次表筒男命之有る其底筒
男命中筒男命表筒男命三神ハ此ハ底土命赤土命攀
土命と出たる事右の如きを其底津少童命中津少童
命表津少童命三神の御名の見えざるハ此ハ合めたる
者あり 然れども陀神ころハ有る此三神を然る
事ありてハ餘りハ事省き過せらる者ありと
ハ本の傳ハ然委^一可^二ハ諸神ハ母呂母呂能神等と訓
ハ非り^三故^四あり^五可^六ハ諸神ハ母呂母呂能神等と訓
り又所ハ依てハ母呂神と訓る所有り共ハ古言あり

然れども唯通ハ一云耳よてハ其規則毎カ如ク故思
ふ類の異なるものと合せしむ其時ハ母呂唯一録に惣て時ハニト訓ベ
母呂ニ云ふ定格此言後世ハ上ヨ置テ諸某ト云ト上
古ハ下ヨ属テ某諸ト多ク云リ記傳四丁ヨ例ヲ引
ルヲカ如ク先古事記ヨ天神諸ト有リ又八百萬神
諸ト有リ又后等及御子等諸ト有リ祝詞式祈年祭詞
ヨ集侍神主祝部等諸大板詞ヨ集侍親王諸王諸臣百
官人等諸又太神官祝詞共ヨ神主部物忌等諸あるト多
ク續紀第ニ詔ヨ汝多知諸第ニ詔ヨ天下能入民
諸ト有るト是る又唯其部類ヲ指テ諸ト再云モ古

の常あり祝詞式ヨ諸間食登宣ニ云事ノ多在ルハ諸
事ヲ間食セシムハ非ズ其場ニ侍入共ヲ某諸トハ
別たズテ唯大凡ヨ云ル万葉二十ノ母呂ニク使
佐祁久等麻乎須又御足
都止米母呂ニクニ須
石歌ヨ母呂ニクニ為天ニク都止米母呂ニクニ須
賣母呂ニクニ有る類是る此も例の上ヨ下
云リ常ヨ云フ諸ハ宝鏡問始章ヨ諸神歸罪過於素戔
嗚尊又其身三ニ書ヨ諸神噴素戔嗚尊又天孫降臨章
ヨ誅諸不順鬼神等ヨ見エ古事記御天降段ヨ亦問諸
神等云ニ即示諸神等云ニ尔思金及諸神白云あるト有
リ出雲風土記杵築鄉條ヨ諸皇神等參集官處万葉五
三丁ヨ諸能大御神等ト詠たら類此る然るハ同
一丁

一諸字ハ用ひるがゞ唯母呂と云所有り宝鏡開始章
モロカミ諸神逐我天孫降臨章第一書更會諸神と云事二所出た
 る共々其訓同ト又右よ引り第三書モロカミよ乞宿於衆神
 衆神曰云々衆神處我以根国云々當隨衆神之意自此
 永歸根国と有る衆神ハ何れも母呂迦徴三耳訓り故
 右の例を推て考るモロカミ諸之某と云ハ俗モロカミ種モロカミニあるど
 の如く諸某と云ハ俗モロカミ一同よと云か如く物を分だ
 す推括て云る其ハ諸之人と云と諸人之の差別の
如シ土も交り農も交りエも交り商
も交り如き如きを諸之人天孫降臨章天孫
彦が亡た所所以衆鳥任事有ハ種の鳥類鳥類
を以て同ト衆字も母呂と云も訓たり又常ハ人
と諸人と云ハ其類も何れも抱つる事無く云稱る

るを思ひ諸諸と云語ハ群群ニ云ハガ云むか如其
 合す可其一諸諸と云語ハ群群ニ云ハガ云むか如其
 ハ古事記石屋戸段八百萬神諸ニ有り又天孫降臨
 章又其第六一書モロカミハ八十諸神モロカミと有り此二モロカミ同ト事を崇神
 天皇七年御紀八十萬神と有と合せて曉る可一
 但右の八十諸神の諸を與巨と訓来外ハ外外ハ例も
 並並一當當ぬ事あり其ハ他一書一ハ八十萬神一と有を
 其二二ハ限限二萬字二並並きも不審一事ありすや然然も
 八十萬諸神一と有けむと其字ハ何時一ハ脱一けのど
 も訓一ハ猶遺り傳一ハ水一らみて一有一へりりけ一也一
抄諸字一を母呂一と云又意富余曾又美那一と有り兩
字を諸字一兩足一を諸足一兩又一を諸字一と云い我も人も物

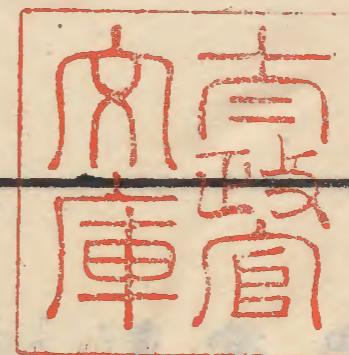
も事も合ひて一なる事を諸共尔
云り母目ハ群よて能聞ゆるあり ○不負於族此云字
我羅尔磨概茸ハ諸本共尔字無きを今神へる事ハ
上三十一 四丁 己ハ註るか如ク其ハ於字ハ古書ハ爾と訓
ひ字ありを其ハ當る訓の見えざらハ脱たる事灼然
けとばるる ○上件大地海原之諸神と云るハ大綾津
日神大直日神底土命赤土命磐土命五神ハ其ハ御名
出た水ハ此中ハ非ず又底津少童命中津少童命表
津少童命の如キハ海原之諸神の中ハ收めて事漏じ
可ク唯大地之諸神と有る耳外ハ思合す可キ神無
きを古事記ハ所見たる伊豆能賣神ハ第六一書ハ水

門神等號速秋津日命と有るハ大地ハ属たる神也
爲つ可ク吹ハ神宮ハ傳へたる速佐須良比賣此ハ神
大後詞ハ根国底之国坐と有るハ大地ハ属たる神
として合せて二柱耳る然れども大綾津日神大直
日神あどもハ餘多の枝神も坐す故ハ其等と合せて
諸神とハ惣云る可ク
古事記ハ其御身降の所
ハ改於投彙御杖所成神名
衛主躬戸神云と有て終ハ右件自躬戸神以下邊津
甲斐辨羅神以前十二神者因脱著身之物所生神也
有るハ其ハ泉門よて成水ハ神の事を傳誤る由
己ハ傳十卷二百十六丁より始めて次ハ論云る如く
あるハ此の若て此傳ハ天照太神月讀尊素戔鳴尊
あど三柱の珍子等の生坐ハ事の無キ不甚ク美好き

正説よハ有ける然るハ傳ハ卷より十卷に至る迄次ニ説明の論正一たるガ如ク正書ハ既而伊弉諾尊伊弉册尊共議曰吾己生大八洲国及山川草木何不生天下之主者歟於是共生日神云次生月神云次生素戔鳴尊云こと有る是正説よて信よ父母ニ神の生奉りて給ふ所あり然れば此一書よ其三神の御生坐る事の益キハ其正書と相協いたる説よて愛たしとも何と云ふ言なき許よむ有ける然計り尊キ珍子神等と他諸神と共よ大地海原之諸神と云中よ混り奉りよどき者ありとや然れば第六一書及古事

記あるの傳ニハ中古よ出来起りたる僻説ある事云も更なる事よむ有けり但右の珍子神等實ハ三柱素戔鳴尊亦名あり故よ其實ハニ神也とも傳ニ何と云ふ三神こいて並出せるを以て唯目易り令事あり此御稷の時よ成坐る神等ハ天照太神の荒魂和魂神等と素戔鳴尊の荒魂和魂神の成坐りし所由傳十卷よ己よ説るか如し此よ大綾津日神大直日神の御生坐るを神官の古記よハ此時左右の御眼を洗はせ給へるよ在津日神直日神ハ生坐し御鼻を洗はせ給へるよ速佐須良比賣神ハ生坐る趣よ傳たりハ却よ第六一書又古事記あるの傳説よハ變よ勝と

光緒二十二年八月...



る者あるを... 但此一書... 何事... 正書... 神等... 成出... 相貫... 可く... 正一讀む... 後又成て乱リ...

安政三年二月八日始之同二十三日夜終焉

